

シンポジウム

AI以後の人文・社会科学 を問う

参加自由・同時通訳有

日付：2020年3月27日（金）

場所：立命館大学衣笠キャンパス
創思館カンファレンスルーム

■ 開会の挨拶（14:25-14:30）
遠藤英樹氏（立命館大学）

■ 基調講演（14:30-15:30）

アンソニー・エリオット<Anthony Elliott>氏
「Chatbots, Talk and the Re-engineering of Identity」
（チャットボット、トーク、アイデンティティのリエンジニアリング）

■ パネルディスカッション（15:40-17:30）

パネリスト：

アンソニー・エリオット氏（サウス・オーストラリア大学）

神田孝治氏（立命館大学）

アダム・ドーリング氏（和歌山大学）

須藤廣氏（法政大学）

遠藤英樹氏（立命館大学） ※兼：コーディネーター

主催：立命館大学人文科学研究所 重点研究プログラム「グローバル化とアジアの地域」（代表：遠藤英樹）

共催：JSPS科研費 基盤研究（C）17K02142

「アジアにおける平和の記憶を紡ぐメディアとしてのダークツーリズム」（研究代表者：遠藤英樹）



立命館大学
人文科学研究所
INSTITUTE OF HUMANITIES,
HUMAN AND SOCIAL SCIENCES

お問合せ：

立命館大学人文科学研究所

Tel 075-465-8225/Mail jinbun@st.ritsumeai.ac.jp



人文研
Twitter

シンポジウム

AI以後の人文・社会科学を問う

(シンポジウム概要)

AI 以後の時代において、人文・社会科学はどのように自らを刷新していくべきなのか。本講演とシンポジウムは、このことに関する視点を提供しようとする。とくにアンソニー・エリ奥特氏の講演では、機械と機械間のコミュニケーション通信はもちろん、ヒトと機械間のトークが日常的になる時代において、これまでの社会学が刷新される必要性が述べられることになるだろう。

AI の複雑なシステム——チャットボット、先進的ロボット工学、ビッグデータなど——は、社会学者アーヴィング・ゴフマンが論じたような社会的相互作用、トーク、自我の形成と密接に結びつき、それらのあり方を大きく変容させつつあるのだ。

(アンソニー・エリ奥特氏略歴)

アンソニー・エリ奥特(Anthony Elliott)氏は、サウス・オーストラリア大学の社会学教授である。英国ケンブリッジ大学でアンソニー・ギデンズのもと社会学を学び、現在、Hawke EU Jean Monnet Centre of Excellence 所長をつとめている。また、Academy of the Social Sciences in Australia (ASSA) のフェローであり、Australian Council of Learned Academies (ACOLA) の人工知能専門家ワーキンググループのメンバーでもある。

彼は、社会理論や現代社会学にとり非常に重要な業績を世に送り出してきた。著書には、ジョン・アーリとの共著『Mobile Lives』(ミネルヴァ書房より『モバイル・ライブズ』として2016年に翻訳が出版)のほか、『Reinvention』『Identity Troubles』『The Culture of AI』などが多数ある。



(会場アクセス)



立命館大学衣笠キャンパス
創思館カンファレンスルーム

主催 : 立命館大学人文科学研究所 重点研究プログラム「グローバル化とアジアの地域」(代表: 遠藤英樹)

共催 : JSPS科研費 基盤研究 (C) 17K02142

「アジアにおける平和の記憶を紡ぐメディアとしてのダークツーリズム」(研究代表者: 遠藤英樹)

お問合せ : 立命館大学人文科学研究所 075-465-8225 / jinbun@st.ritsume.ac.jp